

【目指す児童像】

やさしい子  
元気な子  
よく学ぶ子



ホームページ

はち まん

八幡の森

学校だより 第9号

令和5年10月16日

宇都宮市立昭和小学校

発行責任者 宮澤文洋

## 年度を折り返しました

10月6日（金）に第1学期の終業式を実施しました。保護者及び地域の皆様には、本校教育活動への御理解と御協力に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

式では、4月に伝えた、3つの「あ」、「あんぜん・あいさつ・ありがとう」について振り返りました。その中の「ありがとう」は、目に見えるものとして、5月と9月にやさしさ貯金箱を実施してきました。回を重ねるごとに子供たちの感謝は、クラスの友達、学年の友達、縦割り班の友達、周囲の大人へと広がってきていることを感じました。

それから、学期間休業には「家族の人たちを笑顔にする」取組をお願いしました。名付けて、家族を笑顔にする大作戦です。小学生なので、火や刃物を使わず、自分にできる事を考えてもらったところ、下校時には「校長先生、子供用包丁を持っているからお手伝いしようと思います。」と声をかけられました。やる気に感謝です。また「出かける予定があるのでお手伝いは難しいです。」といったことも相談されました。こちらやる気をもってくれたことに感謝です。出かけた先で、何ができるか作戦を練るそうです。さて、なぜこのようなことを子供たちをお願いしたのか？それは、御家族の人たちが、「毎日の暮らし」の中で、お子さんを一生懸命に守ってくれているということを知ってほしいからです。5日間、御家族の皆様には、お手数をおかけしてしまったかもしれません……。多分おかけしたことと思います。



5日間の学期間休業を挟んで12日（木）には、第2学期の始業式を実施しました。式では、昨年と同じ「本番に強くなる」ことを伝えました。2学期は、運動会を皮切りに大きな行事や発表の場が控えています。その1つ1つを本番と捉え、事前の準備、成功した自分への自信、失敗した際のリカバリーの仕方などを、体験をとおして少しずつ身に付けていってほしいと考えています。子供たちに「本番に強くなるためには？」と聞くと、「練習を真剣にやる。」と答えが返ってきました。さすがです。そこで、今年は「練習は本番のつもりで□□□□、本番は練習のつもりで□□□□。」を伝え、自分ならば□□□□の中にどんな言葉を当てはめるか考えてもらいました。御家庭でも、大人の経験をもとに話題にさせていただけると幸いです。最後に、練習への向き合い方として「集中」や「切り替え」の大切さも伝えてみました。

2学期も、保護者及び地域の皆様には、子供たちが生き生きと学び遅く成長していけるよう、本校教育活動に対しまして、引き続き、御理解と御協力をいただきますようお願いいたします。



## お弁当の日ではお世話になりました

10月4日（水）お弁当の日を実施しました。今回は、おにぎりだけ持参し、おかずは給食で提供する「おにぎりの日」です。御家族の皆様には、お忙しい中、材料選びから、にぎる作業までお世話になりました。すべて自分で作業したり、又は一緒に作業したりとそれぞれの力量に合わせて、当日の朝を過ごしたようです。お陰様で、子供たちは友達と楽しくランチタイムを過ごすことができました。さて、目的は、食事について親子で共に考える機会とすることや、感謝の心を育むことです。そしてもう1つ、材料を選びながら、一緒におにぎりを作りながら、お子さんとたくさん話されたでしょうか。こちらも大切です。



## つかみ取れ 努力の先の 優勝を

10月3日（火）、運動会実行委員長と副委員長から、今年の運動会スローガンと赤白それぞれのシンボルマークが公表されました。たくさんの候補の中から児童たちの投票で選ばれた作品です。

スローガンは「つかみ取れ 努力の先の 優勝を」に決定しました。6年生の作品です。

赤組シンボルマークは6年生、白組シンボルマークは5年生の作品に決定しました。運動会プログラムには、作者の名前を掲載いたします。赤組作者コメント「赤の鳥は不死鳥をイメージして描きました。運動会が永遠に続くようにという思いを込めて描きました。」白組作者コメント「龍の絵を描きました。龍は強いから白組も強くなってほしいという思いを込めて描きました。」赤白ともに見事な作品です。

【赤組】



【白組】



## 「1番になりたかった！」

上段の運動会の話題に関連して、私事で大変恐縮ですが、次女の話をしていただきます。タイトルの「1番になりたかった」は、彼女が小学校で初めての運動会に参加し、徒競走が終わって、家族のもとに帰ってきた時に発した言葉です。その後しばし、曾祖母に向かって嘆いておりました。曾祖母は、それを「そうだったね。1番になりたかったよね。」と繰り返したためたところで、私に「こんなに小さくても、1番になりたいって思うのね。」と語りかけました。

暫くして、大村はま先生の「教えるということ」の中に出てくる一説が、このこととリンクしました。それは『子どもというのは身の程知らずに伸びたい人のことだと思うのです。(中略)伸びたいという精神においてはみな同じだと思います。力をつけたくて希望に燃えている。その塊が子どもなのです。』です。

そして、私が当時担任していた1年1組の子供たちの「伸びたい」に答えるならば、研究し、勉強の苦しみと喜びを感じ、まずは自分が、伸びたいという希望にあふれているべきだと、途方もなく大きな覚悟をしたことを懐かしく思い出します。ちなみに、彼女の賞状は「努力賞」でした。